

令和6年9月27日

乳製品需給等情報交換会議における御意見

東宗谷農業協同組合

- 北海道では、経産牛頭数、一頭当たり乳量、死廃率の数字は、現状としていい方向に動き始めている中、北海道の農家やJAは、バターを輸入に頼らず、自分たちで供給したいという思いでいる。しかし、それには脱脂粉乳の在庫問題がついて回り、この出口対策を実施しないとバターを供給できないというジレンマがついて回っている状況。
- 北海道では今夏、一時期、気温の高いときもあったが、暑熱の影響はほとんどない。粗飼料についても、道北では雨が少し多かったものの、全道的にはいい状況。現在、収穫作業を行っているデントコーンについても、かなりいい環境で作業が出来ている。このようなことから、生産目標から大きく下振れしていた生乳生産量は、今後、取り戻せる部分が少なからずあるだろう。ただ、もう少し経ってみないと、正確な数字は出てこない。
- 今後、生乳生産量の変動要因は色々あるので、状況を注視しながら、うまく国家貿易をハンドリングしていただきたい。
- 北海道では、昨年から今年にかけて乳価が上がるのが遅れ、収益を出せずに離農していった生産者もいる。そうしたことも、決して大きなものではないとは言え、生乳生産量のマイナス要因につながっている。北海道では、今後、どのように基盤を維持していくのかという議論を随分と重ねているところ。

ホクレン農業協同組合連合会

- 令和6年度の北海道の生乳生産は、昨年の猛暑による授精の期ズレの影響を受け、6～7月は前年を下回ったが、8月以降については、分娩頭数が増加していること、前年の様な猛暑とならなかったこともあり、直近においては前年を上回っている状況にある。
- 今後においても目標数量に向けて取り組んでゆく。
- 直近の生乳需給においては、生産の回復に向けて取り組んでいる一方、需給の改善には至っておらず、脱脂粉乳とバターの跛行性は存在している。
- 我々、生産者としては、需要のあるバターを安定的に供給するために経営基盤の回復を図っていく事が必要であり、生乳需給の安定に向けては、やはり脱脂粉乳の需要の問題から、継続的な在庫対策を含めた対応を引き続き、乳業者や国のご協力を頂きながら取り組んでいかなければならないと考えている。
- 現状の試算において、12月のバターの確保が出来ているとのことから設定した輸入枠の範囲での対応と考える。
- また、年度末のバターの在庫水準が前年を下回る可能性があるとのことについて、輸入を含めた出回り数量を注視してゆく必要があり、カレントアクセスを含めた輸入枠の取り進めについて、前回の会議において説明されたとおり、状況に応じて、入札が必要以上の

ものとならないよう、国による対応をよろしくお願いしたい。

一般社団法人中央酪農会議

- 今年度の生乳生産量は、今夏が昨年度に続く酷暑であったことや、北海道での昨年度の酷暑による分娩間隔の「ずれ」による生産回復の遅れなどにより、Jミルクでの直近(9月)の予測では、6月予測に対して▲82千t程度(バターの製造量に換算して約▲3千t)下方修正された。
- しかし、各月のバター在庫量は、依然、2.5カ月水準を超えており、輸入枠の追加の必要性は感じられず、6月に追加した4千tの枠については、今後の需給動向を注視しつつ、必要に応じて減量願いたい。
- 次年度以降の生乳生産量は、若齢の乳牛頭数の減少等から自然体では減少する可能性もあるが、昨年度と本年度は酷暑という特殊要因で減少したことを踏まえる必要がある。また、昨年度に本会議で実施した酪農全国基礎調査の結果では、経営主年齢が若い酪農家や後継者のいる酪農家を中心に2割を超える者に規模拡大の意向があり、潜在的な生産意欲はある。しかし、脱脂粉乳在庫量が需給上の重荷になっていることや、円安による経営悪化、今後の為替動向が不透明なことなどが足かせとなっていることも減産の要因であることに留意願いたい。
- さらに、6月にバター輸入枠を4千t追加したにも関わらず、今回Jミルクが公表する年度末のバター在庫量は、6月に公表した数量より▲4千t減少している。その要因には、バターの出回り量等が6月予測より上振れ(約+2千t)しており、脱脂粉乳需要との格差がさらに拡大していることもある。
- 生産者団体としては、バターも含めた国内の牛乳乳製品需要は、極力、国産で供給して行く方向で取り組んできている。この件は、この場でも再三要望してきているが、生産者団体では、製品需要の消費拡大に限界があるので、乳業者における脱脂粉乳需要の拡大に係る実効性の伴う指導や支援を行い、国産バターの安定供給を実現できる生乳の増産環境の整備をお願いしたい。併せて、物価上昇を上回る国民所得の実現もお願いしたい。

一般社団法人Jミルク

- 厳しい酪農経営が続いている状況ではあるが、生乳生産量は、増産の動きがあるものの、昨年及び今年度も酷暑が生乳生産に影響を及ぼし、前年並みの生乳生産量と見込まれる。
- 需要面では、飲用牛乳は乳価引き上げによる値上げが8月で一回りするものの引き続き需要の低迷が続いている。
- バターは、単年度の需要量が供給量を上回る状況が継続しており、6月に措置された国家貿易による輸入枠数量の追加分4千tはすでに大部分が落札され年内に売り渡される見通しであり、引き続き需給動向を注視し需要に対応した安定供給に努めることが求められることから、適切な国家貿易の運用をお願いしたい。
- 脱脂粉乳は、依然として需要が低迷しており、業界で協議しながら、生・処が協調して取り組む対応が欠かせないと考える。

- また、学校給食用牛乳の供給が停止する年末年始や年度末の生乳需給は一時的に緩和傾向が強まるが、昨年度も苦労して処理して乗り越えた乳業メーカーもあるので、引き続き、関係者と情報共有を密にして対処していきたいと考えている。

一般社団法人日本乳業協会

- 本年度は、昨年夏の猛暑の影響により、種付け時期が遅れたため分娩がやや遅れていることが生乳生産の月別推移に影響しているが、年度トータルで見た場合、生乳生産はほぼ前年度並みになると予測。
- 昨年12月に価格改定があったものの、輸入バター価格も高騰していることから、国産品に対する需要は比較的堅調に推移。また、追加輸入の判断があったこともあり、年末の最需要期に向けて在庫は確保されている。
- 猛暑の影響もあり、アイスクリーム類向けの需要は比較的堅調に推移。他方、最大の需要先である発酵乳については、回復の兆しはみられるものの、依然として消費は低水準。このため、脱脂粉乳の需要は引き続き低調に推移するものの、在庫対策により年度末在庫は適切な範囲に収まるものと見込まれる。
- 本年度は、生乳生産に加え脱脂粉乳の生産もほぼ前年度並みで推移すると見込まれるため、脱脂粉乳の需給は緩和傾向が続くものと推測。
- 当面は問題なく推移すると思われるものの、来年度以降については、生乳生産が減少傾向で推移すると見込まれるため、乳製品、特にバターの在庫水準の推移を注視し、適切に対応する必要性が高まってくるのではないかと懸念している。

卸売業者

【業務用】

(バターについて)

- 国産業務用バターに関しては引き続き割り当てとなっているが、更なる制限は見受けられない。
- 今後為替が円高に進むと思われ、輸入バターに置き換える加工メーカーも増えると予想されるが、現時点でその動きは感じられない。
- 加工メーカーではすでに国産バターの安定供給が望めないことを把握しており、NBを国産、PBは輸入品に規格変更するなどして対策を講じる企業もある。国産バターの使用にこだわる先をこれ以上減らさないようにすることが、国内酪農の持続につながると思われ、更なる供給バランスの改善を望む。

(脱脂粉乳について)

- 在庫率も低い訳ではないが、現時点で2歳未満の頭数が少ないことから、今後の生乳生産が落ちると予想されているため、来期の増販計画を改めて、前年並みか若干の物量制限を検討している乳業メーカーもある。
- このまま円高傾向となれば、大手加工メーカーは国産脱粉から輸入脱粉調製品に切り

替えることも大いに予想されるが、先行き不透明として、現時点で拡販の意図は無いようだ。

- 乳酸菌飲料では比較的好調で使用量が増加しているカテゴリーもあり、このようなところは国産脱粉を多く使うので、国産脱粉の需要を高める為にも、バター同様に国産にこだわる加工メーカーに配慮する必要があると思われる。

【家庭用】

- 市販用バターは引き続き、売場におけるバター欠品は無く、供給は順調であると認識している。
- バター納品率は98%以上を維持しており、弊社の実績上は堅調な動きを見せている。価格改定に伴う購買の減少は一時的にあったものの、足元は回復基調となった。
- 一方で、市場においては、数量は昨年を割り、市場・弊社ともに金額と数量の伸び方に乖離があるため、全体的には消費の落ち込みが伺える。
- 主要メーカー様の家庭用商品におけるバター在庫需要予測は、年内までは欠品はしないという声が多い。
- 需要期などを鑑み、欠品することの無いように供給面をカバーいただいております、現時点における供給体制は概ね問題ないと判断している。
- 市販用バターの動向は、天候不順、猛暑、離農などによる生乳生産減や、外食需要・インバウンド需要の拡大などが複合的な要因が影響するため、引き続き留意しながら、需給調整の一翼を担うべく尽力していく。

一般社団法人全国スーパーマーケット協会

- 我々の会員は家庭用バターの需要先としての立場になるが、基本的には家庭用バターの販売数量が大きく増えたり減ったりする状況にはない。先ほど、資料の説明の中でバターの陳列状況調査でも欠品等はないという報告もあったとおり、店頭で物がなく混乱するような状況というのは、ここしばらく起きていない。ヨーグルトの全体的な消費量も変わらないという状況。牛乳についても値上がりしている中で、点数が落ちているところは特段、認められない。
- 我々が困るのは、政府から出る情報と売り場の状況が異なるといった事態が生じること。こうなると、我々は消費者に対する説明ができなくなってしまう。乳製品も含めて商品が当たり前のように店頭で並ぶ状況を確認していただくとありがたい。また、情報の透明性も確保していただきたい。

一般社団法人日本パン工業会

(バターについて)

- 量的な面では、今年の北海道においては懸念されたほど猛暑ではなく、国産バターの在庫量が適正とされる範囲内にはあると聞いているが、乳業サイドからは前年同水準程度の供給と言われている。為替の影響もあり、外国産バターの価格は国産バターを上回っている。

るものの、バターを使用した製品の需要が一定程度ある中、原料の安定確保という意味でも本年5月時点拡大していただいた4千tの輸入拡大枠は維持ないし拡大していただきたい。

(脱脂粉乳について)

- ひっ迫感、過剰感はなく、引き続き、安定供給をお願いしたい。

協同組合全日本洋菓子工業会

- 我々は業務用バターの需要先であり、会員は洋菓子メーカーや製造小売りで規模は様々であるため、トータルでどうなのかといった話は申し上げにくいですが、全体として6月以降の国産バターの需給状況には大きな変化はない。6月時点で調達に不安なしと回答していた企業は今後も特段問題がないと見ているが、一方、調達に不安ありとしていた企業の大半は、今でも不安がある状況。
- 仕入先と企業との取引関係が大いに影響しているので、業界として必ずしも全体の需要が不足しており困っているということではないが、少なくとも、全体の供給が潤沢であればこうした問題は生じないであろう。需給状況は我々にとって、厳しいところには引き続き厳しい状況にある。
- 使用するメーカー側では、原材料は高騰し、バターの供給にも不安があることから、今は冷凍技術も発達しているので、クリスマス関係のものも含めて需要期の生産を出来るだけ前倒ししている。このため、今この時点で、バターを例年より使用する場合もある。
- 対応策としては、引き続き国産バターから輸入バターへの切替えや輸入バターの使用比率の引き上げ、代替品の使用等が考えられるが、輸入バターも価格が高騰しており、容易に切り替えが出来ない状況にもある。
- 洋菓子は品質維持の関係からバターへのこだわりが強いが、調達面の不安が続く中、新商品についてはバターの使用の抑制を真剣に検討している企業も出てきている。
- 価格については、調査した企業全てが引き続き「高止まり」「上昇が続いている」と回答しており、輸入バターも含め、供給量と共に対策を求める声が多い。
- 国産バターの供給量の回復、バター全体の安定供給と価格上昇の抑制に一層注力をお願いしたい。

一般社団法人日本洋菓子協会連合会

- 洋菓子業界において、今年前半、バターが非常にひっ迫した状況だという声があった。我々が調査して徐々に分かってきたことは、十分に供給を受けられている店舗、供給を受けられない店舗があり、店舗によって卸側の対応が異なっていたということ。時間をかけて調べたところ、卸の対応がまちまちであり、会員によって状況が異なるということが分かった。最終的に、業界全体で不足しているという結論には至らなかった。
- 夏場の洋菓子の消費量は、他のシーズンに比べて大きく落ち込むのが常だが、特にこの数年の夏の猛暑続きは、生産量と売上に大きな影響を与えている。その他、慢性的な人手

不足、あるいは昨年からの原材料・エネルギー費の値上げによる製品価格の改定等の要因により、夏場のみならず年間を通じても洋菓子の売上げ、生産量が伸び悩んでいることから、むしろ今はバター不足の要因というものが考えづらい状況にあるということが言えるではないか。

- この先、需要期である年末が近付いてくると不足が発生するのではないかとという心配もあるが、特に人手不足や働き方改革の影響で、どこの店舗でも、昔のようにどんどん商品を製造すればよいという状況にはなく、半年くらい前から半製品を作ってストックしておく傾向になりつつある。このため、年末に集中してバター不足が起きるような現象は今後起きないのではないかと考えている。そうはいても、人手不足の解消・労働時間の解消のためにストックしておくということがどこの店舗でも出来る訳ではないので、傾向としては緩やかに変化していくものと見ている。
- いずれにしろ、現在出回っているバターの量が均等に業界内に行き渡るように、業界内で議論して問題を解消していきたいと考えている。

全国菓子工業組合連合会

- 菓子業界の需要は回復してきており、製造すれば売れる状況になってきているが、乳製品を含む各種菓子原材料費や人件費の上昇が経営を圧迫している。
- バターについても供給に限りがあるため、菓子の製造を増やせないもどかしさの原因になっていたが、輸入バターの追加輸入により、国産バターも含めて一時の供給ひっ迫感は解消してきており、追加輸入が効果を発揮しているものと考えている。まずは、供給不安解消への努力に感謝したい。
- 一方、菓子では国産バターや生クリームの使用を製品の特色としているものも多く、輸入バターで代替できない需要も存在するため、引き続き、国産バターの増産と持続的な安定供給をお願いしたい。
- 輸入バターのSBS入札結果を見ると、7月にはマークアップに縮小がみられたものの、8月、9月では、再びその幅の拡大がみられる。これは、輸入バターについても市場に溢れるほど潤沢ではないということを示しているのではないかと。在庫が昨年よりも減るという見通しの中で、今後も、バターの輸入枠については、必要に応じて適時適切な追加をお願いしたい。
- 国産バターの増産には、同時に生産される脱脂粉乳の消費拡大が不可欠であり、我々の業界でも、使えるものなら使ってみようということから、和菓子甲子園において、和菓子に脱脂粉乳を使うといったチャレンジも出てきている。脱脂粉乳を売る努力をしていただければバターの安定供給にもつながると考えている。バターと脱脂粉乳間の相対的価格体系の見直しや、令和5年以降増大している輸入バターの売買差益も活用して、一層の消費拡大に取り組んではどうか。

一般社団法人全国消費者団体連絡会

- 酪農経営においては、飼料価格や資材の高騰により、継続的に厳しい状況にある中で、安定した生乳生産の維持に尽力いただき、感謝している。一方、世の中の物価上昇と食料品の値上がり状況は顕著で、牛乳や乳製品においても昨年から複数回にわたる値上げがあった。またこの夏は、猛暑や自然災害に加え、新米の価格上昇など、消費者が大きく影響を受ける事態が起った。世間の情報に惑わされ、消費者不安からか、過剰な消費行動が引き起こされ、家計の苦しさにも拍車がかかるなど、消費者側に大きな混乱があったことは否定できない。メディアも含めて情報のリリースには注意が必要だと改めて感じたところである。
- そんな中で節約志向や買い控えがさらに進み、牛乳や乳製品の需要に低迷が生じることは、今後も起こりうると考える。中長期で考えて、消費者が牛乳離れすることなく、安定的に牛乳や乳製品を購入し摂取するには、美味しさや安心はもちろん、健康・栄養の面からの価値認識をもっと高めることが必要と思っている。
- また、昨今のように自然災害が頻発する中では、常温保存が可能なロングライフ牛乳の有用性が再認識されるべきでなはいかと感じている。賞味期限が長く、安心して便利でおいしい、防災用のローリングストックになる、外出時に持ち歩ける、食品ロス削減にも貢献できる、これらの認識の共有がさらに進むことを望んでおり、多方面からの働きかけが行えればよいと考えている。

(以上)